

## 劇場外における演劇空間の研究 A Study on Play Spaces outside Theater

○藤井さゆり<sup>1</sup> 佐藤慎也<sup>2</sup>  
Sayuri Fujii, Shinya Satoh

Recently, in the field of art, has increased activities outside the building. Among these plays are more diverse media. The activities are increasingly caught in the genre. And performances outside the theater. The theater now being built well maintained, meaning and significance in the theater to explore the area without asking. And consider the representation space of theater.

### 1. 研究目的

近年、芸術分野全般において、既製の建築から外へ向かう動きが活発になってきている。一般に演劇は空間的制約が多いと言われているが、演劇の表現手法が多様化する現代においては、一概にそうとは言えなくなっているだろう。現在では様々な要求に対応する劇場が盛んに建設されている。しかし、現代演劇フェスティバルなど、大きな演劇祭で発表される作品においても、劇場外への動きは未だに活発である。

整備の行き届いた各種の専門劇場が作られている今日において、既製の劇場ではない場を求め、その空間で作品を発表することの意味や意義を探り、空間的問題点も検証しながら、現代における演劇の表現空間を考える。

### 2. 研究概要

本研究では、作品と空間の関係性を軸に、劇場外における演劇上演空間の歴史的背景や変遷、各作品における客席と舞台の関係や、作品と場の持つ意味の関係に着目し、研究を行う。

### 3. 研究方法

#### 3-1. 研究対象

図1のように分類される全てのタイプを対象とする。

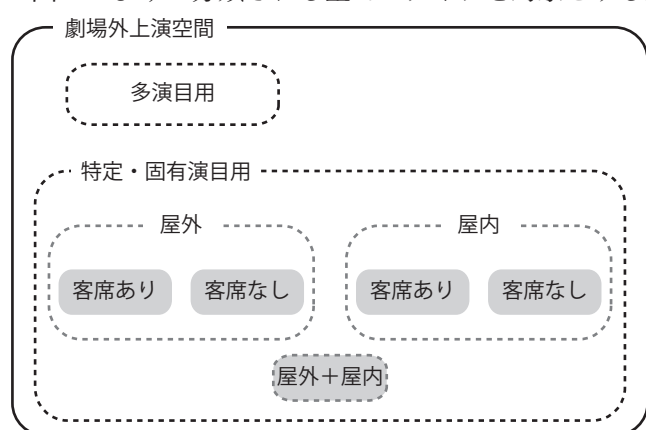


図1 劇場外における上演空間の分類

劇場外における多演目用の上演空間とは、いわゆるテント劇場と呼ばれる部類である。これらは、固有の演目のために上演空間を創出してはいないが、場所性に帰属した空間を作っていると言える。固有演目のための上演空間においては、作品と空間の関係性が顕著に表れる。

#### 3-2. 調査方法

以下の3点について文献調査、ヒアリング調査、実踏調査を行い、相互の関係性を探る。

- i. 作品と空間の関係性
- ii. 観劇方法
- iii. 空間を選んだ理由

### 4. 研究結果

#### 4-1. 演劇における上演空間の変化

20世紀以前の演劇において一般的に使用されていた舞台形式として、プロセニウムステージが挙げられる。しかし、制作現場における演出家の発言権の拡大や様々な演劇運動により、プロセニウムアーチが否定された。また、1960年代に社会情勢などの理由から活発化した小劇場演劇により、小規模空間で上演するために、観客が一方向から舞台を見るなどの従来の演劇的構造が再考された。

このように20世紀後半になると、現代演劇における概念の変化とともに、上演空間の空間的制約が新しい劇場のかたちを生み出した。

今日では、客席配置や客席勾配が変化できる劇場が増え、演劇における様々なジャンルの要求に合う多目的な劇場や、専門性の強い演劇劇場など、様々な劇場がつくられ、演出家たちの取捨選択の幅が広がっている。

一方で、演劇そのものの領域や可能性を探り続けている演出家たちもいる。彼らは、上演空間においても劇場という枠を飛び越えて可能性を探っている。実際に劇場という場がなくても、発表する場としての「劇場」は都市の中に存在し、それを様々な形で作品の中に取り込んでいるのである。

<sup>1</sup> 日大理工・院・建築

<sup>2</sup> 日大理工・教員・建築

<sup>1</sup> Graduate Student, Graduate School of Sci. & Tec., Nihon Univ.

<sup>2</sup> Assist. Prof., Dept. of Architecture, Coll. of Sci. & Tec., Nihon Univ., Dr. Eng.

#### 4-2. 劇場外演劇における観劇方法の多様化

劇場外で作品を公演する場合、主に客席があるか、ないかによって、作品に対する空間の関係性が変わってくる。

客席がある場合には劇場外という空間が、舞台装置として作品の一部となる。上演空間には客席と舞台と呼べる空間が対になるように設定され、その特性は音響や照明、背景としての要素が作品に取り入れられることが多い。よって演劇的構造の変化は大きくは表れてこない。

客席がない場合には、舞台装置としてだけでなく、公演方法、公演時間、公演回数、作品の構成等、作品に関する様々な要素に影響を与えることが多い。客席がない場合、移動をとともなうことも多く、時間の変化や上演空間の特性も変化することから、上演に関わるすべての要素に関係してくる。

このようなことから、本研究では劇場における舞台と客席の関係を、見る・見られるの関係として抽出する。そして、劇場外における上演空間においてそれぞれの空間的位置関係を図化し、観劇方法から見る作品と空間の関係性を探る。

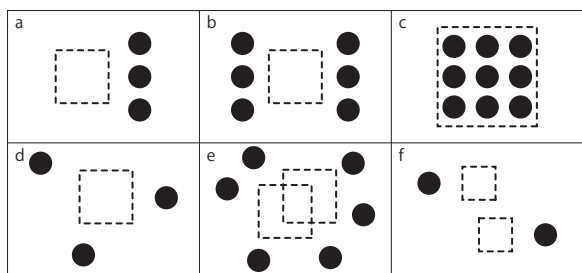


図3 客席と舞台の空間的位置関係

#### 4-3. 劇場外演劇における作品と場の関係

演出家たちが上演空間として選ぶ場において、場の特性をどのように作品に取り入れているのかをみることで、場が作品の内容にどのように影響しているのかがわかる。場所性としては、空間／歴史／コミュニティと3つの要素に分けることができる。

場の空間的要素を作品に取り入れている例として、中野成樹演出の「しあわせな日々」が挙げられる。背景には鉄橋が架かる河川敷という場において、河川敷の対岸が近くて遠い場というイメージを作品のコンテクストとして取り入れている。場の歴史を作品に取り入れている作品は、横浜市黄金町というまちが辿ってきた歴史を題材に作品を構成している、高山明演出の「赤い靴クロニクル」が例に挙げられる。コミュニティを作品に取り入れている例は、同じく、高山明演出の「個室都市 東京」である。池袋西口公園を中心としたコミュニティに介入し、作品をつくり出している。

#### 5. まとめ

今回の研究では、劇場外における演劇の上演空間を、客席と舞台の位置関係と場所のもつ特性という観点から分析を行っている。今後は、それらが各作品にどのように影響を及ぼしているのかを、細分化して考えていかなければならない。

#### 【参考文献】

- 1) 宮岸泰治 他：講座日本の演劇8 現代の演劇II、勉誠社、1997年5月30日
- 2) 佐和田敬司 他：演劇学のキーワードズ、ペリかん社、2007年3月31日

表1 主な調査対象

サンシャイン63				個室都市 東京				Cargo Tokyo-Yokohama				しあわせな日々				エレクトラ			
演出		高山明		演出		高山明		演出		リミニ・プロトコル		演出		中野成樹		演出		長島確	
上演空間		まち		上演空間		プレハブ/会議室		上演空間		まち/トラック		上演空間		河川敷		上演空間		民家	
客席	×	移動	○	客席	×	移動	○	客席	○	移動	○	客席	○	移動	×	客席	×	移動	○
スピードの中身				桜の園～最後の実験～				赤い靴クロニクル				墨田区在住アトレウス家				完全避難マニュアル 東京版			
演出		中野成樹		演出		矢内原美邦		演出		高山明		演出		長島確		演出		高山明	
上演空間		寺/博物館		上演空間		公園		上演空間		まち		上演空間		民家		上演空間		まち	
客席	○	移動	×	客席	×	移動	○	客席	×	移動	○	客席	×	移動	○	客席	×	移動	○